

## 私の引揚げ記録

福岡県 堤 渡

私は、大正八（一九一九）年一月二十二日に、福岡県山門郡大和村（現在の大和町）で出生、昭和八（一九三三）年に村の高等小学校を卒業するとすぐに、家業に従事することになった。

家業は代々、有明海で貝類を主とする養殖生産の漁家だったが、有明海の自然の資源は豊富で、沿岸一帯の漁民を潤していて、生活も比較的安定していた。

二十歳になって徴兵検査を受け、昭和十四年十二月に召集、西部第四十六部隊に入隊し、軍務に服していたが、昭和十五年三月に召集解除となった。

帰郷するに際して私は、部隊の人事係准尉から、満鉄への就職を勧められたので、四、五年は家業以外の仕事を経験することも考えていたので、す

ぐに承諾し満鉄に入社することとなった。

いったん家に帰り、就職準備を整えて、昭和十五年六月に、下関から当時の豪華客船「熱河丸」に乗船、丸二日間の航海のあとに大連港に着き、初めての外国の土を踏んだ。

これが筆舌に尽くされぬ、地獄への出発点になるうとは、夢にも思わないことであった。

大連港から満鉄の職員に引率されて、私を含めて約百人の就職者は、当時では有名な大和ホテルに入った。ここで数日、今でいう新入社員教育を受講し、その後再び満鉄職員の指揮によって列車に乗せられ、配置される各駅に着くごとに、降ろされていった。

下関から一緒だった仲間と次々に別れてしまい、周囲がだんだんと寂しくなり、心細い思いをしたものだった。私はグループの人たちと共に、四平省の四平駅で降りたが、ここが私の新しい勤務場所であった。

四平駅での私の最初の仕事は、機関車の拭き掃

除で、油の染み込んだぼろ布で、機関車の上から下までを拭きあげることだった。このような作業は、入社当初は大学出の人でも、新入社員教育訓練として、この仕事を経験しなければならなかった。

満州の夏は短く、八月の末になると秋風が立ち、朝夕が冷え込んできた。だんだんと寒さが加わってくる、機関車へ送水するパイプが凍り始めるので、凍結防止対策をし、既に凍ってしまった所は解氷作業をしなければならなかった。

私は、埼玉県出身の草野盛男君とペアを組んで解氷係となった。寒い夜でも、二人で手分けをして機関車を見て回ったものだ。真面目な草野君と二人でよく頑張ったものと、今でも思い出すことがある。

若くして大陸に渡ってきた者の中には、私の尺度では測りきれないような、肝っ玉の太い者や、考えられないような無鉄砲な行動をする者や、変人か豪傑か紙一重のような者が多かったが、この

ことをいちいち記せばきりがないので、書くことを省略するが、本当に多種多様な顔ぶれが揃っていたものだった。

四平駅で勤務しているときに選ばれて、奉天にある鉄道教習所の入所試験を受けて、無事合格した。この鉄道教習所は、全満に所在する満鉄の機関区から選ばれた者が集まっていたので、なかなかの人物もいたようだった。

私は一番年長だったので、部屋長を仰せつかった。各機関区ごとに一室を与えられていたので、何ごとにおいても各機関区の競争であった。四平機関区の名誉のためということと、自分の卒業成績の順位確保のためということと、みんなは真剣になっていた。夜、点呼後の学習も、みんな真剣になって励んだものだった。給料を頂きながらの教習所での三カ月の生活は、実に楽しく、私の一生を通じて一番思い出に残る三カ月であった。

終了証書を手にして、四平の寮に意気揚々として帰ってみて驚いた。私の部屋に、全く見も知ら

ない男が入っていたのだ。寮母さんが慌てて入ってきて、「空いた部屋がなかったたので、堤さんと一緒に入ってもらおうと思って！」と言って恐縮しながら弁解していた。私も部屋長という立場があったので、渋々と承知した。しかし、この出会いが縁というか運命というか、その後の私にとって、忘れられない男となったのである。

その男の名は中村清とあって、福井県出身で、後には兄弟以上の仲となり、北朝鮮からカムチャツカまで、生死を共にして生きのびた男であった。彼は引揚げ後は福井県庁に就職し、お互いの家を訪問し合ったりして、家族ぐるみの付き合いが続いた。

四平機関区に戻った私は、機関助手として、機関車に乗務するようになり、満鉄の鉄路を走り回っていた。その後しばらくして、また新人が私の部屋に入ってきて、起居を共にするようになった。その新人とは、新潟県出身の鈴木竜雄という男で、北朝鮮の会寧に所在する陸軍三部隊を満期除隊し

た、陸軍兵長であった。彼も除隊時に推薦されて満鉄に就職した者で、四平駅構内の機械関係の職場に配置されたが、勤務に就いて何日も経たないうちに、仕事場で作業中に額に鉄片が当たり、かなりの深手の傷を負い、それから終日、何もせずに部屋でごろごろするようになった。

身近にそんな事故があったころ、満鉄の沿線で大きな列車事故が起きて数人の死亡者が出たが、そんな事故のことを考え合わせると、私は一応鉄道教習所を出て機関車に乗務しているが、あまり好きではなかった。

部屋で中村君や鈴木君と日常的な話をしていたが、いろいろな話題の中から察するに、両君ともあまり鉄道の仕事には、積極的な気持ちを持っていないようだった。そのうちに、だんだんと現在の自分たちの職場の話をするようになり、いろいろと考えるようになった。

鈴木君の話によると、彼が会寧で除隊するとき、人事係准尉といろいろと相談した際に、満鉄

以外にも、会寧に残って仕事をするならば、よい職場があると言われた、ということであった。

その話に興味を持った私たちは、早速、詳しいことを知りたいと思ひ、手紙で問い合わせた。いと鈴木君に頼んだ。鈴木君はすぐに連絡してくれたので、間もなく返事がきた。それによると、三人一緒によいからすぐに来い、という内容であったので、私たちはすぐに実行することとした。

正式な手続きをしての退職ではなく、夜逃げのような形でここを出るのだから、準備が必要だった。

私は、満鉄から支給された制服や外套などをまとめて、仲のよかつた宮城県出身の鎌田君に渡し、返納を依頼した。三人は、自分たちの私物はそれぞれ自分で梱包した。なにしろ逃げ出すのだから、周囲の人たちには分からないようにしていた。各自の荷物は、夜になってマーチヨ（満人の馬車）が着き易い場所の窓から、外に投げ落としておいた。中村君がマーチヨを呼びに、四平駅に一足早

く出た。マーチヨがきて、荷物は駅まで何ごともなく運ばれた。鈴木君が途中で憲兵に職務尋問を受け、所持品を調べられたが、無事に駅に着いた。

四平駅から満人などに紛れ込んで汽車に乗り、それから列車を乗り継いで、鮮満国境の凶們を無事に通過して、朝鮮に入った。

昭和十七年五月某日、朝鮮咸鏡北道会寧郡会寧に着き、その夜は中村君と駅前の会寧館に一泊し、翌日鈴木君と合流して、会寧部隊の人事係竜野准尉を訪問した。前日に鈴木君が、竜野准尉と話し合っていたので、すぐに竜野准尉に案内されて、これからの職場となる朝鮮軍陸軍倉庫羅南支庫会寧出張所に行き、ひと通りの説明を受けたあと、履歴書を書かされた。この所長は、福岡県柳川市出身の古賀という主計少尉だった。

仕事は毛筆の上手な中村君が事務係、鈴木君と私が半現場半事務ということで、軍需品の入った倉庫の管理で、倉庫内の出入個数を正確に記録し、倉庫内の糧秣品が、ひと目で分かるようにしてお

くことだった。ほかに味噌、醤油などの調味料などがあり、ときにはこれを製造、納入する商人の工場を検査することもあった。住宅は一人一棟の官舎を与えられた。官舎の隅には、今まで見たこともないペチカという、石炭を焚いて暖をとる設備のようなものがあつたが、そのころは石炭もなく、焚いたことは一度もなかった。しかし若い盛りなので、布団をかぶって寝てしまえば、昼間の仕事の疲れもあつて、寒いと思うようなことはなく、ぐっすりと寝てしまった。

だが食事には困った。馴れない手で自炊するのだが、自炊も食材があれば何とでもなるが、そのころは偕行社に行つても、将校ならば特別な配慮がなされていたが、私たち軍属の身分の者には、食べ物も被服も買えなかった。ただ乾燥バナナだけはいくらかでも買えたので、中村君と二人、昼食には乾燥バナナをよく食べた。

米の量は不足であつたが、配給があつた。しかしおかずには困った。仕方がないので、乾燥した

ワカメを買つて、三度三度ワカメの味噌汁を作っていた。今思うと、このワカメは大変栄養分があつたらしく、ワカメの味噌汁だけで元気いっぱい働き、あの寒い北朝鮮でも風邪ひとつひかず、よく頑張ることができた。

戦況はだんだんに悪くなり、ソ連軍の空襲も懸念されてきたので、米麦などを山中に分散集積することになり、毎日が多忙になってきた。また、ここにも召集令状が来るようになり、戦死する人もいた。

そのころになると、同僚は競つて内地から妻を迎え、独身は私一人になったが、終戦になつてから飢餓に彷徨するようになると、独身であつたところがどれほど良かったか分からなかった。迎えて間もない嫁さんや、生まれて間もない乳飲み児は、中村君の嫁さんを除いて全員死亡した。

忙しく過ごしているうちに、昭和十八年の正月を迎えた。いつもはワカメの味噌汁ばかりだったが、そこは陸軍倉庫という大世帯、元旦には所長

の裁量だったと思われるがたくさんの餅をつき、日本人も朝鮮人も一緒に作り、豚一頭を分けあげた。何しろ食料品の倉庫だから、その気になればいくらでも食べられたが、私たちは勝手に一粒の米にも手はつけなかった。終戦になり、あの食料品は全部焼却したと聞いて、実に残念に思った。豚も大小合わせて五十頭ほどいたが、これはどうなったかは分からない。

私は、昭和二十年八月十日ごろ、会寧から四十キロメートルほど離れた茂山という地に米を運ぶ命令を受け、日本人職員三人と朝鮮人労務者三十人ほどで、牛車二十台に米を満載して、暑い盛りを出発した。山あいの悪路を、昼夜兼行で茂山へ急いだ。

「明日は茂山に着く」というころになって、日本の敗戦が朝鮮人たちに分かったらしく、不穏な空気が感じられてきた。しかしまだ決定的なこととは分からないらしく、その後も何となく命令に従って作業に従事していた。辛苦の末に茂山に着い

た。ところがそこには、陸倉のトラックに乗って私たちを追い越していった、陸倉職員の家族たちが全員集まっていた。事情を聞いてみると、終戦になったことがはっきりした。そこで全般の状況を判断して、牛も米も全部をそれを運んできた朝鮮人労務者にくれてやった。陸倉にあった五棟の倉庫と野積みのお米など全部を、ガソリンをかけて焼いたとのことで、あとで考えれば実にもったいないことだった。

私たちはすぐに、茂山から白岩に向けて出発した。同僚たちの家族もトラックで南下した。茂山から白岩に通じる白茂線は、ソ連軍の参戦と同時に大陸から、または北朝鮮の奥地から逃げてきた避難者の列が、途切れることなく続いていた。白茂間の道路は、海拔千メートルに近い高地で、八月半ばとはいえ既に秋の気配が漂い、朝夕は肌寒く感じた。しかし日中は三十度を超える猛暑となり、この中を避難者は黙々と歩いた。中には、在寧時代の知人も多く見かけたが、暑さの中の薄い

着衣には、既に汚れや破れが目立ち、容貌まで変わり、疲れ果てているのが分かった。中には死んだ子を背負い、子供の手を引いて、行列に遅れまいと、必死の形相で歩いている婦人もいた。足手まといになる老人が、路傍に敷いた布団に置き去りにされ、うつろな眼で通りすぎる人たちを眺めていた有様が、今でも目に浮かぶ。

茂山から約百キロメートルを数日歩いて、白岩にたどり着いた。白岩は、九月初めには初雪が降るとの話で、既にそのころには霜が降りていた。避難者の集団は続々と白岩に到着した。白岩からは列車が出て南下できると聞いてきて、懸命に歩いてきた避難者だったが、それがデマで列車が出ないと分かると、重い足を引きずり駅を離れていった。会寧出張所長の成田氏は、羅南支庫の人たちと一緒に、ソ連軍の捕虜となって護送される途中で、前後をマンドリン銃で監視されている中を脱走して、再び私たちと会った。あの状況の中で脱走したとは、驚いたことだった。そのころのソ

連兵は、人間の命などは何とも思っていないから、全くの奇蹟であった。

私たちが会寧組は、朝鮮鉄道の鉄道員の宿舎にしばらくということ、世話になることになった。白岩にもソ連兵が進駐してきて、外を見ると数人ずつ徒党を組んでうろろしているのが見えて、気味の悪い思いだった。日に日に白岩の街も物騒になってきた。私たちがお世話になっている鉄道宿舎にも、ソ連兵が一人侵入してきた。絶えずきよるきよるして落ちて着きがなく、窓から外を気にしていた。ソ連軍にも日本の憲兵のような組織があり、占領下の住民に悪いことをすると罰せられるようになっていく。それを恐れているようだった。その姿は、顔には赤い無精ひげが汚く伸び、巻脚絆は足首の所に少し巻き、腰にはこれまた汚い布袋を下げていく。これにはパンを入れていたようだった。実に汚い格好だ。宿舎の奥さんが、塵ひとつないように掃除していた畳の上を、土足であがりこんできた。手には一個の手榴弾を

持つていて「これを投げるとみんな死ぬぞ！」というように、両手を拡げて死ぬようなジェスチャーをして、それから箆筒や机の引き出しを開けさせた。いろいろと物色した末に、机の上に置いてあつた鉄道員の腕時計だけを奪つて立ち去つた。

これが私の初めて接したソ連兵だつた。そのうちあちこちで避難者の女性がソ連兵に犯される事件が頻発している、という噂が耳に入つてきた。朝鮮人の、日本人に対する態度も悪化してきた。

ここにこのままとどまつていても、一利もなしと判断した私たちは、南下することにした。野積みの軍需品を覆つていたシートで、大きな背負袋を作つた。宿舎の奥さんに布を裁つてもらい、各人で馴れない手つきながら袋を縫いあげた。私たちはその袋に食糧や衣類を詰め込んで、鉄道員夫婦に別れを告げて出発した。白岩から城津までの行程も、白茂線のとくと同じ状態で、疲れ果てた避難者の群れは、のろのろと南を目指して歩いた。小さな村をいくつも通りすぎ、あるときは山道を、

またあるときは浅い広い川を渡り、野宿を重ねた。私たち避難者を一番悩ませたのは、保安隊と称する朝鮮人と思われる者たちが、一里から二里ほどの距離をおいて、関所みたいな所を設けて避難者を止めて、身体検査と称して所持品、現金、時計、衣類など、めぼしい物を片っ端から取りあげたことだつた。ひどい日には一日に七、八回もこれをやられた。私も城津に着いたときには、白岩で詰め込んできた背負袋は完全に空になつていた。このことがなければ、後に興南で一冬を過ごすことができて、多くの人たちが寒さと飢えに遭わなくて済んだであろう。そのことを思うと実にひどいことをしたもので、忘れることはできない。真夏に北朝鮮の奥地から歩いてきて、服装も顔も見ると哀れになつてゐる者から、さらにむしり取るようにして奪つた物を、彼らは見てどんな気持ちがあつたであろうか、と考えるとむしように腹が立つてくる。このころには、米など持つてゐる者はなかつた筈だが、どこに隠して持つてきたのか、少



しは持っている者もいたようで、朝鮮人からトウモロコシなどと交換していた。しかし大部分は持たない者ばかりで、乞食のようなことをしたり、あるいは拾い食いをするよりほかはなかった。あの状況の中で、生きるためには致し方ないことであつた。多くの避難者は、息も絶え絶えながらやつと城津に着いた。私たちは、元城津高等女学校の校舎に収容された。

避難者は校舎にあふれて、廊下までいっぱいだった。ここで偶然、陸倉の事務員だった金沢さんという女性に再会した。金沢さんは会寧高女を卒業してすぐに陸軍倉庫に採用された人だった。ソ連兵の暴行は、この校舎に集中しているのではないかと思うほど、昼も夜も入れ替わり立ち替わりに現れては、金品を奪い、女をさらっていった。避難者の女性はみんな髪を切り、顔は煤で汚したりして男性を装ったが、胸だけは隠すことができずに、その胸を探り女であることを確かめていた。男性たちは、女の人をかばうのに大変だった。金

沢さんは高女を出たばかりだったが、大柄な人だった。「金沢さん、ソ連兵がきても決してここを動くなよ。いくらなんでも、ここでは暴行はできないだろうから！」と、私たちは注意していた。そのようなときに、赤鬼のようなソ連兵が銃を構えながら、私たちの方に近づいてきた。果たして金沢さんに目を付けた。そして「立て！」というように、顎をしゃくった。するとどうしてだろうか、あれほど注意していたのに、何かに魅せられたように金沢さんは立ち上がった。顔は真っ青になり、操り人形のようにふらふらとしながら、その赤鬼のあとについて教室を出ていった。このころのソ連兵は殺気立っていて、脅しでなく本気で発砲することが多くなっていた。妻をかばって殺された人の話も聞いていたので、うっかりとは手出しはできなかつた。それでも放つてはおけず、私と中村君はすぐに教室を出て、二人のあとについていった。

赤鬼は、金沢さんを便所に引きずり込んだ。中

の様子は分からないので、外側に回った。折からの強い西日で、磨り硝子が透けて見え、おぼろ気ながら中の様子が分かった。二人は立ったまま、激しく争っている様子だった。突然、パーンという銃声がして、隙間から薄い硝煙が流れてきた。私は冷水を頭から浴びたような気がして、身体がすくんでしまった。窓には一人だけの影が映っていたが、それもすぐに消えた。すると「助けて！」と、私たちの足元で声がした。私たちは驚いて足元を見ると、大きな便槽があつて、それには蓋がしてなかった。便槽いっぱいにたまつた糞尿の中で、金沢さんがもがいていた。便所と便槽は続いていたのだった。彼女は糞尿の中を、もがいてきたのだった。私と中村君はすぐに糞尿にまみれた金沢さんを引きあげて、足洗い場に連れていき身体を洗った。金沢さんは、齒の根も合わぬほど震えていた。

脈絡もなくしゃべる彼女の話を総合すると、必死で抵抗したが、もう駄目だと思つて便壺の中に

飛び込んだ。(その当時の便壺は、木製で長方形だった)だが、上半身をつかまえられて、一度は引きあげられたが、下半身が糞尿まみれだったので、赤鬼も諦めて手を離したので、再び便壺の中に落ち込んでしまったのだった。銃声は脅しに一発、発砲したようだった。

また、こんなこともあつた。私と顔見知りの人で、会寧で豆腐を軍に納入していた大久保老人も、この城津女学校に避難していたが、家族はどうなつたか知らないが、ここでは老人一人になつていた。この大久保老人、どのようにして城津までも無事に持ってきたのか、多額の紙幣を持っていた。私も靴の底など、隠せる所には隠してきたが、早々に全部取りあげられてしまった。その紙幣が、ソ連兵に探りだされて強奪された。大久保老人は、ソ連兵にむしゃぶりついて「返せ！ 返せ！」とわめいたが、その抵抗はむなしかつた。しかしあの不気味な状況の中で、だれもが恐れていたソ連兵に無手で抵抗したのは、さすが明治生まれの氣

骨と、大いに感心したものだ。

このところは全くの無法地帯で、ソ連兵のやりたい放題だった。城津に五日ほどいて、列車に乗って南下することができた。どうして列車に乗れたのか？ ソ連軍の人的な配慮か、それとも朝鮮側のはからいか、その辺のところは全く分からなかったが、悲惨をもたらす徒歩による南下ではなく、一応列車に乗れるだけ有り難かった。だが実際は列車といっても無蓋貨車で、それに身動きもできぬほど詰め込まれた。しかもこの貨物列車の走り方は実に気まぐれで、駅でもない所で長時間停車したり、二分もしないうちに発車したり、その度に私たちは車内で混乱した。

特に便意をもよおした者は、実に困ったことだった。男性は何とか処理できるが、女性の場合はそれこそ大変だった。何しろいつ発車するか分からないので、貨車のすぐ横で片手で列車の一部を握り、「ゴットン」と動けば排泄を中断して、乗らなければならない。仲間や家族が、女性を引っぱ

りあげるといふことになり、それこそ恥も外聞も、だれの念頭にもなかった。白く大きな尻が、日暮れに丸く浮きあがっていた様が、まだ私の目には残っている。

三日ほどして咸興に着き、地獄のような列車から解放された。だが、それは束の間の喜びであって、本当の地獄はこれから始まったのだった。

咸興でも学校のような所に入れられた。やれやれと思う間もなく、ちよつと南に下った興南という所に、歩いて移動させられた。一カ所に集められてみると、避難者の数はおびただしい人数だった。氣力を奮い起こして私たちは歩いた。咸興では終戦前からの日本在住者が、日本人世話を結成して、避難者の世話をしていた。避難する者の行列は疲れ果てていて、幽霊のようだった。世話の人たちが「もう少しです。頑張ってください」と、大声で勇気づけてくれたが、同じ日本人からの励ましの言葉は嬉しく、勇気を奮い起こした。咸興から興南までの約十キロメートルの行程

を、一日がかりで歩いたが、興南は北からの避難者で、ごった返していた。もうこのころになると、だれも米や金はなく、拾い食いや乞食をしている者も出たが、病気や飢えで死んで行く者が出始めていて、実に言いようのない苦しみだった。興南では、北からの避難者は旧日本窒素の寮や、小学校や旅館などに収容されたが、なおも続々と興南に流れ込んできて、収容する場所もなくなっていた。

ちようど時期は秋の収穫期で、北朝鮮の農家は食べることに困っている避難者を、稲刈りや取り入れに雇っていた。私も稲刈りに一日雇われたが、飯を食べさせてくれるだけで、賃金は払わなかった。しかしそれでも、食べることができただけでもよかった。また、山から薪を下ろす作業など、様々な仕事をして命をつないでいた。

興南の日本人居留民会から入る情報は悲観的なものばかりで、日本へ帰れる見通しは全くなく、その反面死亡者は日を追って多くなってきた。私

と同年配の男性数人が、世話会の依頼で死体運搬の作業をすることになった。約四キロメートルほど離れた、通称三角山まで一体を運ぶと、世話会の方からソ連軍の軍票で十円もらった。私はすぐに市場に行き、十円で拳大のおからを一個買った。これが私の一日分の食糧だった。ここの露天市場には、あらゆるものがあつた。穀物類、塩干物、食用油、衣類、金さえ出せばなんでも買えた。戦時中には見られなかったような豊かさである。戦争が終わったばかりで、どうしてこんなにたくさん物資があるのか、と不思議な気がしたものだ。

そのころの私の体は、自分でも気味が悪いほどの浮腫があつて、体を動かすことも大変で、ほんの少しの突起物にもつまずき、自分でもおかしいほどに転んでいた。そんなことが一カ月も続いたろうか、そのうち不思議なことに、体の腫れが少しずつ引いていったのである。当時、私の食事は中村君夫婦の世話になっていたが、中村君の奥さ

んは茂山からトラックで避難しているので、略奪にも遭わず、少しは金も持っているようだった。食事といっても、それは雑炊の薄いようなもので、お椀に半分くらい、ほかには何も食べる物がなくて、これでよくも回復に向かったものである。

しかし、栄養失調の故か、一日に何度も脳貧血を起こして倒れていた。これは初めての経験で、どうして、いつの間に倒れたのか、自分では全く意識がなかった。気が付いたときは、土間に転がっていた。胸の動悸が激しく、目が全く見えなかった。私は、「目が見えない！」と繰り返し叫んでいたが、しばらくすると動悸がおさまり、目も見えてくる。中村君も、心配そうに私を覗き込んでいた。その後も数回倒れることもあったが、脳貧血も次第に治ってきた。ただ自分の足が信じられないほど重かった。

ここ興南の漁港は、明太子がたくさん水揚げされ、興南港の商店には、あの今でいう「博多土産の明太子」と同じものが、箱の中にむき出しに並

べられて売られていた。私は、店の主人が向こうを向いているときに、すかさず手を突っ込み、あの辛いのを口いっぱい放り込んだ。何度もこのようにして食べたが、店の主人はわざと向こうを向いてくれているような感じだった。考えてみると、興南には日本窒素という巨大な工場があつて、多くの日本人が生活していたが、この店の主人も日本人相手の商いで、多分に親日的になつていて、私に対しても哀れに思っていたのかもしれない。私は、ひどい栄養失調で、食べ物らしい食べ物をほとんど食べていないし、塩分も摂っていなかった。

塩漬けの明太子で塩分を摂り、その塩分の効きめが現れて浮腫が引いたのだからと、私は素人判断だが信じていた。また、虱しらみは全身にこぼれ落ちるほどわいていた。

会寧を出てから、髪は一度も切ったことはなく、伸び放題で、その髪は虱の卵で蜘蛛の巣のように白くなっていた。顔にも虱が絶えず這い回って

るので、いつも顔を撫で回す。虱の方でも自然抵抗体ができて、顔の面にべったりと平たくはりついて、ちよつと顔を撫でも落ちないようになっている。私は、それを鱗をはがすようにして取った。こんなことはもちろん初めての体験で、聞く人はとても本当とは思わないだろう。シャツの袖口を十センチメートルほどめくると、虱で白くなっている。それを指でぬるぬるになるほど潰して、元のように袖口を戻して、五分もしたころ袖口をめくると、前と同じように袖口は白くなっているのだ。

虱の次に困ったのは凍傷だった。興南は真冬は零下二十度近くになるそう。私は、八月の盛夏に会寧を出ているので、寒さに対する準備などは全くしていない。会寧からトラックで来た職員の家族は、布団も衣類も持ってきているが、私は拾った<sup>かます</sup>吠一枚でこの冬を乗り切った。今思っても、これでよく生きたものだといつも思い出す。吠一枚に身を縮めていても、足の先ははみ出て、はみ

出た部分が両足とも凍傷にかかり、これが日夜疼いて、実につらかった。この凍傷は引き揚げてきても、数年間は疼いていた。

さらに疥癬がひどかった。最初は指の股などにぶつぶつできていたが、後には両手両足、尻べたまでにもいっぱい広がりに耐えかねて掻きむしるので、瘡が<sup>かき</sup>いっばいになる。そしてその瘡をまた掻きむしる。そうするうちに瘡は熱い層になって、益々痛かゆくなってくる。ときにはこの瘡が、全身を強烈な電気に打たれたような、ショックを感ずることがあった。それは数千本の針を、一度に打ち込まれたようだった。

晩は電灯も全くない部屋で、横になっても身動きもあまり自由にならない所であった。私の隣に寝ていた婆さんは、洗面器のようなもので用を足していた。この人もやつと立ちあがれるような状態だったが、この婆さんの尿がしぶきになって、私の顔にかかるときもあったが、私は逃げ出す気力もなく、そのままかかっていた。

凍傷と疥癬とで何回も眠れずにいても、数日すると疼きにもかゆさにも睡魔の方が勝ってきて、ぐっすりと眠るのである。毎晩がこのようであつて、今思つてみると、地獄の中を彷徨しているようだった。朝鮮人に身を売る女性も出てきた。このへんのことを記録に書けばきりがない。このような状態になつていた避難者の惨状が、世論を喚起したのか、米の配給があるようになった。私たちはあまり当てにはしていなかったが、実際に米の配給が実施された。このことが一カ月早かったら、どれだけの日本人が助かったか、実に残念な思ひだった。米の配給で、みんな徐々に健康を取り戻し始めた。

四月半ばになると、北朝鮮の興南でも春めいた陽気になり、周辺の山々も、すっかり青みがかつてきた。しかし私の足はまだ重く、小走りすることもできなかつた。毎日の日課は虱取りだった。戦前から興南で理髪店を開いていた、安田さんという人と話をしていううちに、この人は福岡県の

柳川出身で、私の郷里とは一里ほどしか離れていないことが分かつた。話がだんだん通じてきて、散髪してもらつた。伸び放題の髪は、虱の卵で白くなつていたので、安田さんも呆れていたが、髪も髭もきれいにしてくれた。死亡する避難者はほとんど少なくなつた。

五月近くになつて、ソ連側から居留民会を通じて、漁民労務者の募集があつた。行先は、樺太ともカムチャツカとも言われていたが、採用されれば支度金を支給し食糧の配給もする、という条件で、そして労働期間中には賃金も支給し、さらに六カ月すれば日本に帰すということで、多くの人には希望と期待を持った。私が一番こたえたのは、応募しなければ米の配給はしない、ということと言われたことだった。それでは応募するよりほかはないが、しかし労務に耐える、ということが前提であるので、身体検査を受けることになつた。私は、何がなんでも合格しなければ、命の問題にかかわつてくると思つたが、労務に耐え得るとい

う自信は全くなかった。自分の足だけでも重くて困っているのだ。興南からだけでも、応募者は千人近くいたのではなかるうか。避難者も半数ぐらいだと思ふ。身体検査の結果、約八百人が採用されたが、そのうちには女性が約百三十人含まれていた。予想していたとおり、私は最初の身体検査で、実にあっさりとは不合格にされた。身体検査は、大きな体育館のような建物の入口の、右側と左側の両方にソ連の女医がいて、書き込んだ書類に目を通して、受検者を素っ裸にして見るのである。私は、疥癬でその跡が汚く、栄養失調で全身がドス黒くなっていて、我ながら情けない状態だった。案の定、女医は大袈裟な手振りで駄目と言っているのが、言葉では分からないがその様子で知った。これは大変だ、明日からの飯にありつけない、命の問題だ。考えた末に同室の井上君に「おれはこちらの方から行って、あの女医に不合格にされた。君は向こうの方から行って、おれの名になっっているこの書類を、持っていつてくれない

か？」と頼んだ。井上君は軍隊から脱走して間もないので、体は美しく、肉づきも私とは比較にならない。既に身体検査には合格していた。それがうまくいって、私も合格することができ、その日のうちに集団検疫のため別の建物に集められて移り、漁業就労者だけの共同生活が始まった。その後残った避難者は、三十八度線に向けての集団脱出を本格化した。私たちは頭を丸坊主にされて、入浴させられ、予防注射も数回受けた。十分とはいえないが、大豆や高粱の混じった食事も与えられた。

五月半ばになると、出航の日も決まった。だが支度金のことについては、音沙汰がなかった。身につけているものは、昨年の夏物のまま、布団も一枚ぐらいは必要ではないかと支度金を当てにしていたが、もうどうしようもなかった。私は、何の支度もできないまま、わけも分からず興南港岸壁に横づけになっている船に、約八百人の採用者と共に乗船した。



昭和二十一年五月の某日、船は岸壁を離れたが、すぐには出航せず沖合に停泊し、翌日に興南港を出航した。

会寧を出て九カ月余り、惨憺たる苦難の末の新しい船出だった。六カ月間は日本には帰れないが、生活は保障されている。カムチャツカには、どんな生活が待ち受けているのか分からないが、興南のような地獄の生活はないだろうと思った。

興南の三角山には、私の手で埋めた人々や、ほかの人が埋めたであろう膨大な数の死者がいた。私もその数の中に入るところを、幸運にも命長らえることができそうだった。様々な感慨が去来し、物故者の冥福を心から祈り、船に揺られた。

船中ではまず漁労団の総会があり、役員が選出された。団長も副団長もその他の役員も、興南を出る前に既に根回しが済んでいて、ただ民主的な形をとるための名目的な総会にすぎなかった。役員は、すべて元日本窒素の職員の人のようで、「異議なし！ 異議なし！」の連発で、あつという間

にいろいろなことが決まってしまう。北朝鮮の奥地から、または大陸方面から避難してきた人中からは、一人の役員もいなかった。

団長になったのは、色の浅黒い体格のよい原田卓夫という人物だった。私たちが一番関心を持っていた支度金のことについては、説明はあつたがさっぱり要領を得ないし、何とも釈然としなかった。避難者たちからは、承服できないという、不満の声が漏れてきた。北朝鮮の奥地から、命からがら避難してきて、髪も髭も伸び放題で服もぼろぼろの六十歳ぐらいの人が、大声で怒鳴った。不思議なことに、終戦前から咸興や興南に在住していた者からは、何の異議もないし質問もなかった。彼らは既に支度金を手にしているのではないか、と思ったのは私一人ではなかった。避難者は切実な思いで、支度金に望みをかけていたのだった。支度金だから出航前に渡されるのが当然、と思いつ込んでいた。だが、支度金は支給されなかった。しかし原田団長は、ソ連側が払わないからだ、と

というようなことは一度も言わなかった。これはソ連側は既に支払っているのだ。ソ連側も、支度金は渡航前に払っておくものと、十分知っているはずだ。役員は全員避難者でない者ばかりで、ソ連側との交渉に入っていない。交渉の内容は全く分からない。これは、役員たちが横領しているに相違ないと思った。

船は休む間もなく航海を続け、数日経ったと思うところにエンジンが止まり、がらがらと錨を下ろす音がした。甲板に出ると、ひどく寒い感じがした。遠くを眺めると、カムチャツカ半島らしき陸地が遠くかすんで見える。反対側は何もない大海原、空は曇り風も強い。航海中の私たちは、昼も夜も船倉ばかりに押し込められていて、昼夜の感覚が薄れていた。持っていた時計は、とうの昔にソ連兵に奪われていてない。日が落ちると夜になったと思うとうとうとすると、もう夜が明けている。昨夜はよく眠ったと思っていると、また眠くなる。そのうちに分かったことは、カムチャツカではこ

の時期、夜の時間が実に短い。

翌日数隻の舢がぼんぼん船に曳かれ、船に横づけになり、私たちは二十人ぐらいつが、一隻の舢に乗り込まされ、ぼんぼん船に曳かれ陸地に向かった。

陸地に着くまで約三時間もかかったろうか、時計がないので正確には分からない。舢の中の寒さは、私がこれまで経験したことのない寒さだった。周囲の者はほとんど咸興、興南の在住者だったので、十分な防寒衣類を着込み、防寒帽をかぶり、寒さに備えていた。それでも寒さで口も利けない様子だった。

私たち避難者グループは、ぼろぼろになった夏物でこの厳しい寒気のお出迎えには、まさに半死半生だった。陸地が近づくと、数十人のソ連人が珍しそうに眺めているのが見えた。

私たちが上陸したのは、キフチツクの近くのウトカという小さな漁村で、海岸の砂浜一帯には、魚の加工場や倉庫などが幾棟も並んでいて、建物

の軒下にはまだ雪がたくさん残っていた。私たちはソ連人の案内で、倉庫のような所に連れていかれ、そこで青い霜降りのような作業服と、重い作業靴を支給された。夏衣の私も、ひとまずほっとした。

宿舎は約二十五メートルの長い建物で、同じような建物が幾棟も並んでいた。多分終戦まで漁業をしていた、日露漁業の日本人漁夫の宿舎跡であろう。中央に通路があり、両側には畳が敷いてあった。寝るときは、足を通路側にして横になった。恐らく鮭の漁期だけに使用していたものと思われる。倉庫から浜辺まで、自然の傾斜を利用してローラーが並べられて、魚の加工品を箱詰めにしてこれに乗せると、ひとりで海岸まで走り、船に積み込まれるという仕組みになっていた。これも、終戦の混乱で日露漁業がそのままにしていたらしく、ローラーは赤く錆びている箇所が多かった。

私たちは、カムチャッカで初めての一夜を過ごした。ほかの人たちは、布団や毛布にくるまっ

寝ていたが、あれだけの人数の中で私一人だけが、作業衣のままのごろ寝だった。このようにしてカムチャッカの生活が始まったが、鮭の漁期までにはまだ間があるので、雑用仕事だった。最初の仕事は、雪の重みで潰れないように、梁を支えていた丸太を一カ所に集める作業だった。驚くほどの丸太の数だったが、多くの人間で片づけるので、一日で終わった。翌日から薪拾いだった。長い間に砂浜に打ちあげられた流木を、約五キロメートル歩いて拾って来る作業。栄養失調でまだ足が重く、凍傷が疼いていて、重い足が砂浜にねり込み、実に悪戦苦闘だった。

そのころのカムチャッカは、悪天候の日が多く、濃霧の中を歩かされた。先頭には、現地のソ連人が案内に立っていた。霧で一メートル先も分からなく、列から外れると恐ろしいので、必死だった。先頭の者たちがそれぞれに拾った薪を担ぎ、折り返してきた。拾ったものは木の根のようなもの、板きれのようなもの、雑多で、霧の中からぬつと

現れると巨大な人間に見えてびっくりした。私も運よく砂浜に埋もれている木片を見つけた。栄養失調の私でも持てるほどの木片だった。仲間たちの手前、何か持っていかなければ具合が悪かったので、ほっとした。前に行く者を見失わないように、やつの思いで宿舎に戻った。

流木拾いの次は、昨年漬けた塩鮭を土に埋める仕事だった。ウトカには、古い塩鮭が大量に杉形に高く積みあげられていた。この大量の塩鮭は、日露漁業の日本人漁夫がとったもので、日本に運ぶことができずに放置してあったものだった。

その次の仕事は岩塩運搬で、海岸に岩塩が小高い山にして積まれているのを、百メートルほど離れた加工場のそばまで運ぶ仕事である。木製の箱を背負った組と、それにスコップで入れる組との二手に分かれ、仕事をするのである。箱を背負った連中に、スコップ組が岩塩をすくって入れるのだが、肩の痛みが分からねぬので、お構いなしに入れる。私たちの組は栄養失調者ばかりで半病人だ

だったので、箱を背負った行列は元気がない。重い箱の紐が肩に食い込んで痛い。たまりかねて「易くそんなに入れて！ お前たちが背負って運んでみる。代わってもいいではないか」と、私も大声で怒鳴ったが、だれも交代しようとはしなかった。明らかにスコップ組が楽だ。私の大声で、スコップ組は吃驚して作業の手を休めた。それから、遠慮して少しずつ入れるようになった。ところが、今度はソ連人の監督が「もっと入れろ」と文句をつけた。間に立つスコップ組も困っていた。結局、監督が見ているときは多く、見ていないときは少なく入れることにした。健康なときならこれくらい何でもないが、当時の私たちにはつらいものだった。

このころ浜から千メートルほどの沖合に、数千トンはあると見えた、大きな貨物船が停泊した。ソ連人の話によると、貨物船には岩塩が満載されていて、今度はその岩塩の陸揚げがある、と教えてくれた。今度は船からの陸揚げである。ある日

岩塩揚げの作業から帰ると、私たち数百人の荷物が全部ひっくり返され、畳の上に足の踏み場もないほど散乱していた。何の目的か分からないが、ソ連側で持ち物の検査をしたらしい。これは私たちの納得のいかなることであった。私は、何もめぼしいものは持つてはいなかったが、興南の古本屋で、煙草の巻紙にでもと思つて買った古本が、二冊なくなつていた。みんなもいろいろと持ち去られていた。私は、避難途中で何十回も検査され、その都度めぼしいものから奪われていて、背負袋には古本二冊と、友人の子のへその緒を入れた小さな缶があるだけだったが、そのへその緒だけが残つた。乗船時には縁切りした筈の風が、また増え始めた。仕事が休みのときには、虱取りが日課になつた。

そんなある日、私たち数百人が鮭加工場前に整列させられた。ウトカで一番偉いソ連人の工場長が、たどたどしい日本語で、ここに着いたときに全員につけられた認識番号を、次々に読みあげた。

私の番号もあつた。一瞬私は不安になつたが、なぜ私が呼ばれたのか分からなかつた。番号を呼ばれた十人ほどの者は、前に出て並ばされた。この十人ほどの者は、鮭漁の作業準備に新しく加えられることになつた。そこで私は初めて納得できた。興南で、渡航乗船前にソ連側に書類を提出したが、その書類に「漁業経験の有無」という欄があり、私はこの欄に『有り』と記入したが、そのことを思い出した。私は、漁業経験者として選り出されたのであつた。

私たちがウトカに着いたところから、十人余りの日本人が砂浜に網をいっぱい拡げ、ソ連人の漁夫と一緒に作業をしていたので、私たちも彼らと一緒に作業をするのかと思つていたところ、ぼんぼん船に曳かれた舢に乘せられた。舢には百キログラム以上の砂を詰めた、重たい袋がいくつも積まれていた。私たちは、カバロフというソ連人漁夫の指揮に従ふことになつた。このカバロフという男は、体重百五十キログラムは優にありそうな大

男で、舩は陸地から五百メートルほど沖に出た。カバロフがこの舩のともと櫓で舵を取りながら指揮を執る姿は、鬼のようだった。ぼんぼん船は舩を曳き、大男の指揮に従い、大男の「プラッサーイ！」（投げ下ろせという意味らしかった）の合図で、砂袋を海に放り込むのである。重い砂袋だから、五人でその砂袋を舷まで上げておき、大男の合図があればいつでも放り込めるようにしておく。舩はぼんぼん船に曳かれ、縦横に走り回る。カバロフは舵を取りながら、ここぞと思う所で合図する。約百メートルほど走り、そこでまた放り込む。また角度を変えて百メートルほど走り、そこでまた放り込む。砂袋は北斗七星のような柄杓型になって沈んでいった。この柄杓の柄に当たる部分が陸地まで伸びて、ここに網が張られていた。陸地までの約三百メートルが、網の壁になっていて、そこに鮭が誘導されて、柄杓の先の箱形の所に鮭を入れる仕組みになっていた。

七月に入ると、いよいよ鮭が回遊してきた。カ

ムチャツカに鮭の漁期がきたのだ。経験組の中には、終戦前からこの辺りで操業をしたことがあるという東北出身者もいて、このような漁法には慣れていようだった。だが、ほとんどの者は未経験者ばかりで、それに加えて栄養失調で元気がなかった。とてもではなく、ソ連側の期待する成績をあげることは至難の業だった。

カムチャツカでの体験はまだ続くが、残りの紙数もないので、避難者として生活の一端を記録した。

鮭の漁期が終わりに近づいたところに、私は薪下ろしの作業中に、ソ連の大型貨物自動車にぶつけられて、左大腿骨折の重傷を負って、ウトカの病院に収容されて、そこで入院生活をしたが、そのおかげで体も回復した。

六カ月の就労期間が経ち、鮭漁の漁期が終わった昭和二十一年の十一月に、約八百人の仲間と共に、カムチャツカを出航した。直接日本に向かうものとはばかり思っていたが、船はペトロパウロス

夕に停泊し、そこに約一週間停められた。その船中で、熱病が爆発的に発生し、約半数の人たちが日本に戻る事ができずに、亡くなってしまった。毎日毎日、朝に夕に、水葬が行われていた。そんなこともあって、船はさらにウラジオストックに約五日間寄港し、再び以前の興南港に着いた。私は、終戦前からあった旧陸軍病院に直ちに収容されたが、その医師も看護婦も、以前のままの人たちだった。

汚れて悪臭を放っている衣服を脱ぎ、白衣に着替えさせてもらい、やっと人間に立ち返ったような、救われた気持ちになった。そのときの、山内さんという素晴らしい衛生兵のことは、いまだに忘れられない。

約三カ月間そこで治療のため入院していたが、昭和二十二年二月に、興南から日本に向かった。二月二十日ごろ、長崎県の南風崎港に入港、やっと故国日本の土に一步を踏みしめた。

まだ体は完全に治っていないので、すぐに久留

米の旧陸軍病院に入院し、昭和二十二年四月七日に手術を受けて、リハビリのために別府の旧陸軍病院に収容された。

昭和二十二年十月に、やっと退院をして郷里に帰った。幸いに郷里の役場に奉職することができて、爾来、比較的に恵まれた半生を過ごして今日を迎えたが、私の八十五年の人生を振り返ると、感無量なるものがある。

## 三十八度線を越えて

長崎県 友永倬夫

### 一 北朝鮮・清津に生まれて

昭和十一（一九三六）年清津府弥生町で生まれた私は、今様に言うならば在鮮三世である。

その系譜をたどれば、肥前の島原出身の祖父と長州の熊毛郡束荷村の庄屋の娘だった祖母たち夫婦は、清津開港の明治四十一（一九〇八）年ごろに当地に移住し、祖父はブリキ店を営み、祖母はそのころ既に結成されていた清津日本人会の婦人たちに、華道や茶道を教えていたらしい。

明治四十三年の韓国併合によって、総督府施政に伴い当地が「清津府」に改められたころ、島原に残っていた尋常小学校四年生の父も、島原から清津府大和町に呼び寄せられている。時代が大正に入ると、従兄弟を呼び寄せ、また親戚の小学生二人をも引き取って面倒をみていた。そのうちの

一人は羅南中学校第一回生として卒業し、のちに松本組に入社させたし、もう一人は満州国の林口<sup>リンコウ</sup>にて酒店を営ませた。さらには羅南の知人から養女を迎えて清津女学校を卒業させたが、この人は年若くして夭折してしまった。

祖父はまた、大正の終わりから昭和の初めにかけて清津府の府会議員を務めていたが、特に結成当時から関わっていた清津消防団の組織、装備、設備の充実に大いに尽力していて、敗戦時には副団長として警防団本部に最後まで踏みとどまり、手塩にかけて育てた思い出のある団三十有余年の終焉を自ら見届けたうえで、日ソ両軍の戦火飛び交う中を、夕闇に紛れて清津を脱出したとのことである。

とにかく祖父には、終戦まで「朝鮮・友永兼次郎殿」と書かれただけの宛先で、内地からの手紙類が届いたという逸話が残っているくらい、清津の古顔として名の知られた存在だった。

一方父は、高等科卒業後、商売を志望して大阪



の船場で修行したのち、大正十（一九二一）年佐賀の歩兵第五十五連隊に入隊、精励恪勤して伍長勤務上等兵で除隊後、清津に戻り大和町にて金物店を開業した。

大正十五年には同郷の母と結婚した。昭和初期、店舗拡張のため弥生町二番地に店舗を新築して移転した。昭和七年には兄が出生したが、四十数日で死んでしまった。昭和十一年に私が、同十五年に弟が、さらに十八年には妹が生まれ、弟妹三人となった。

私が物心ついたころには、祖父のブリキ店は従兄弟に譲り、商売は父に任せて祖父母は隠居身分となり、もっぱら警防団や中華料理店や、小作をさせていた中国人たちの面倒を見ながら、土地や借家の管理をして過ごしていた。また祖母は副会長として清津愛国婦人会の世話をしていたので、我が家は相変わらず人の出入りが多く、日本人ばかりでなく中華料理店主の京さんや小作人の王さん一家、それに材木商の李さんなどがしょっちゅう

訪れてきては、一緒に食事などをしていた。

昭和十二年支那事変勃発、十三年張鼓峯事件、十四年ノモンハン事件、そして十六年の大東亜戦争と出生以来次々と起きた「昭和の争乱」の中で育った私は、幼いころから兵隊ごっこやちゃんばらごっこに打ち興じていた。あるとき在郷軍人会幹部だった父に連れられて連隊対抗の市街戦演習を見に行ったことがあったが、私はそれに興奮して、戦車の市中行進を追いかけて感動したものだ。また、講談社の武者物語、歴史物語などを読みあさっていた。清津公立国民学校に入学したころは、「海の零戦」「陸の隼」に触発されて模型飛行機作りに熱中し、雑誌「海軍」と「若桜」を熟読するなど、「神州不滅」を固く信じる「軍国小国民」であった。

昭和二十年になると、内地、朝鮮、満州を結ぶ物資の流通拠点である清津でも物不足は深刻化し、食糧事情にも一抹の不安が漂い始め、経済統制は一段と厳しくなってきたが、我が家では統制

品だったマッチと石鹼を一手に扱っていたし、店頭には世情を反映して、ジュラルミン製の鍋釜や弁当箱の代用品などを陳列していたが、商品倉庫にはアルマイト製の鍋や弁当箱、鉄瓶、鉄釜などの商品が多量にストックされていて、品不足の心配などは全く無かった。

食糧に関しても、米が日常の常食で配給の雑穀はほとんど食べることなく、学校に携行する救急袋に葉や包帯と一緒に煎米と煎大豆の中に、母が箱入りキャラメルや板チョコをいつも忍ばせてくれていたし、おやつには世間一般はどんぐりパンの時代に、餡パンやカステラという贅沢な暮らしだった。

## 二 ソ連の参戦と清津脱出

昭和二十年八月九日。その日の清津はことほか暑かった。

発令されていた警戒警報が解除されて間もない午後の三時ごろ、弟と海岸通りに出て遊んでいると、頭上から突然爆音が襲ってきた。反射的に空

を見上げると、低空で突っ込んでくる爆撃機の編隊が見えた。驚く間もなく地上から応射する対空機銃が一斉に火を吹いた。何事が起きたのかわからないまま、天と地で交錯する銃声にびっくり仰天した。二人は脱兎のごとくに家へ逃げ帰り、祖母が放り出してくれた布団の下に、家族全員体を小さくしてうずくまった。すさまじい炸裂音が聞こえる度に、家屋が不気味に揺れていた。三十分ぐらいすると音がとぎれたので、このすきに電気会社裏の防空壕へ逃げようと階下に下りると、出入口のガラス戸は全部破壊されていてガラスが飛散し、商品は全部棚から吹き飛ばされて床に転がっていた。しかしひるむ暇もなく外に飛び出して、ガラスの破片と瓦礫が散乱している舗道を、夢中で走り防空壕に飛び込んだが、カビ臭い壕内では突然の空爆のショックのせいかわからない、みんなは黙りこくって言葉も発しなかった。敵機が去った夕方、夜間空襲の危険を避けるため、黒煙があがっている港湾施設を眼下に見ながら女学校の横穴壕へ移

動し、そこで一夜を明かした。

翌朝、ソ連の参戦を知らされ、昨日の空襲がソ連機だったことを知ったが、さしたる驚きも動揺もなく、数日後にソ連軍が侵攻してこの地が戦場になるうとは、夢想だにしなかった。しかし母は、父が四月に召集を受けて釜山に出発する際に言い残した、「万一、ソ連が参戦したら清津はたちまちのうちに戦場になるから、そのときはすぐに南朝鮮方面へ避難するように！」との指示に従い、隣の夏川小間物店の家族と共に南朝鮮の太田へ移動することを手配したが、空爆による列車ダイヤの混乱で、切符の入手が遅れてしまった。

八月十三日の払暁、女学校の横穴壕から常盤町のいとこの家に避難していた私たちは、「ソ連軍小部隊が、灯台付近に上陸。我が守備隊と交戦中！」との知らせにたき起こされて、再び近所の人たちと共に清津神社の裏山に退避したが、一時間ほどしたら「我が守備隊が撃退した」との連絡を受けたので、母は妹を背負い祖母の姪のイサ

子姉を連れて下山し、南下準備のために弥生町の家に戻った。

私と弟と祖母の三人は、常盤町の家で一息入れているところに切符入手との知らせがきたが、空爆で電話は不通となっていて母との連絡が取れずに、仕方なく三人で急いで自宅へ向かった。小走りに駆けて家に着いたが、そこにはもう母たちの姿はなかった。常盤町へ引き返したらしかった。夏川の家族は、時間がないので既に駅へ向かったというので、母たちとも駅で待ち合わせることにして、荒れ果ててしまった家に入り必要な荷物をまとめてリヤカーに積み、駅へ向かって走った。

天馬山下辺りから、避難する人々の数が増え始めて、駅前広場に着くころには押し寄せた群衆があふれて大混乱になっていた。みんなの目は血走っていた。連絡されたとおり、混雑の中を駅長室へ行き、切符を受け取り駅舎の前で母たちを待つが、なかなか見付からない。そのとき突然砲声が聞こえた。今度は、空爆ではなく艦砲射撃だった。

「ソ連軍が上陸して来るぞ！」との叫びが聞こえた。天馬山の山かげから盛んに噴煙が上がっている。「清津市街は火を放って自爆を始めたぞ！」と口々に叫んでは、避難民が続々と広場に駆け込んできた。いんいんとして響く砲声の中で、駅のマイクがなりたてて、改札が始まった。取りあえずホームで母たちを待つことにして、人混みにもまれながら改札口を出た。

京城（ソウル）行きの列車が入り、緊張の面持ちで予約車両の前に並んだときに、やっと貨物用の入口から母たちが駆け込んだのでほっとした。これで、家族揃って車中の人となることのできた。緊張感が一度に切れて、虚脱状態になっていた。やがて通路まで詰め込んだ満載列車は発車したが、ふと気が付くと南ではなく北へ向かっていた。海岸線は交戦中なので、経路を変えて輸城を経由して羅南へ出るのだろうか、みんなは勝手に合点していたが、そんな車中の予想もむなし、列車は間違いない北上し富寧で停車しそこで一夜

を明かした後、翌日は茂山駅に着き、さらに奥地へ向かい、木材積み出し用の引込線のような駅舎はもちろん、人家すら見あたらない河畔に客車を置き去りにして、機関車は茂山駅へ引き返して行った。車窓から大河が見えた。だれかが豆満江だと言っていたが、とすれば対岸は満州領ではないか。南下したとしても戦火が収まり次第、再び清津へ帰れるものとこれまで樂觀していたのに、一転してこんな北辺の山岳地帯へ運び込まれるなんて、先行きどうなるのか不安な気持ちに包まれて、その夜はまんじりともできなかった。

翌日、陽が傾きかけたころになって機関車が迎えにきて、我々は茂山駅に引き返すことができた。茂山駅のホームには、人々を満載した貨車が次々と入線してきて、構内は避難民の群れでごった返していた。ここで我が家に奇跡が起きたのである。駅の洗面所に水くみに出た祖母と、水を飲みにきた祖父がばったり出会ったのだった。清津から一人で行動してきた祖父が、この混乱の中で祖母と

ばったりと会うことができたとは、人智の及ばぬ夫婦の絆というか、運命の不思議さを感じさせた。

その日、白茂線の列車の手配がつかないので、延社まで徒歩で進むという避難命令が出たが、そのころには既に夕闇が迫っていた。徒歩で延社に向かう集団は、その数約七、八百人、日本人ばかりでなく朝鮮人家族も相当数混じっていた。統率者がいるわけでもなく、まるで野火に追われる蝗の大群にも似た逃避行となった。

一夜目は野宿、二夜目は寒村の学校の教室で、三日目は、朝鮮農家に宿泊しながら約四十キロメートルの山道を踏破して、四日目の午後にやっと延社に着いた。早速、祖父は警察へ行き状況をたずねると、「清津方面のソ連軍とは目下停戦状態にあり、やがて停戦協定が締結されるだろうが、詳細は不明である。避難民は白岩に集結することになっており、列車輸送の予定だが、機関車の手配が遅れているので、駅で待機していて欲しい」と教えてくれた。退避線に停車していた無蓋貨車

にすし詰めになったままで迎えを待つことになった。そんな所に戦場を離脱してきた兵隊たちや、疲れた足取りで続々と集まって来る避難民の間からは、「日ソ戦は停戦ではなく、日本が無条件降伏したらしい」という、信じ難い情報が流れてきた。しかし大多数の人々は、敵が流した流言飛語ではないかと言っていて、半信半疑の状態だった。

三日ほど待つてやっと迎えにきた小型機関車は、避難民を満載した貨物列車を引いて山峡を縫い、急坂を息も絶え絶えに登って、高原の駅白岩に着いた。

八月二十五日。日本の敗戦が本当であることが伝わると、街の様相は一変した。朝鮮人の家の軒先には、どこでどう準備していたのか、太極旗が一斉に掲げられて、街中には「マンセー、マンセー」の歓声がこだましていた。一夜にして朝鮮は他国となり、我々は敗戦国民になったのである。また、この日には武装解除の命令が出て、祖父も今まで大事に携行していた、家に伝わる日本刀を

役場へ提出に行った。

八月二十六日には、イワノフ少佐の率いるソ連軍が白岩に進駐してきたが、初めてソ連兵を間近に見ることとなった。白系露人しか知らなかった私は、銀髪、金髪、茶髪、そして黒髪というソ連人の多民族性に驚いた。

後日、このときの通訳のソ連軍将校が、明治町で父親が洋服屋を営んでいた私と同級生のヤンコスキー君の叔父さんだったということを聞いて、あの一家はロシア革命を逃れて清津にきたのだと聞かされていただけに、何か釈然としない思いがしたものだ。

夜になると、敗戦国民となった我々に恐怖が襲ってきた。酒気を帯びて、毛むくじやらかな腕にマンドリンと称する自動小銃を抱えたソ連兵が、集団で「ダワイ！　ダワイ！」と叫びながら町の中を襲っていた。戸外では、ときおり銃声が響いていた。我々は、分宿していた鉄道官舎で身を潜めて、恐怖の一夜を明かした。

翌二十七日。昨夜のあのソ連兵の暴虐ぶりを知り、さらにこの山間地に何万もの人間が留まっていたのは、食糧が枯渇するだろうとの不安から、吉州方面への南下が話し合われた。赤ん坊を背に幼子の手を引いた避難民の群れは、長蛇の列をなして線路沿いに南を指して落ち延びて行った。その足取りは葬列のごとく、暗くて重たかった。吉州まではおよそ七十キロメートルで、進む鉄路は苛酷だった。幾重にも続くトンネルの長い暗闇。

峡谷に架かる幾つもの鉄橋。そして枕木に渡された細い板のうえを進むのだが、谷底をのぞけば目がくらむし、立ち止まると足がすくむので、ただ前だけをにらんで渡っていた。「ソ連軍の軍用列車が来るぞ！」と声が掛かると、列車から自動小銃を乱射されでもしたらという恐怖感におびえては、線路脇の土手を駆け下り草むらに身を隠していた。このような有様で、避難民の群れは昼間は炎天にさらされて汗だくで歩き、日が落ちれば川原や無人小屋で体を寄せ合って、深々として

伝わってくる山の寒気から身を護りながら一路南下して行った。

明日はいよいよ吉州に着くという前夜、幸いにもある地主の屋敷に泊めてもらうことができて、久しぶりにゆつくりと手足を延ばして休んだ。翌朝、出発に際してその家の主人から「吉州ではソ連兵の暴行略奪が激しいと聞いているから、迂回して鶴東面へ出る方が良策ではないか」と忠告してくれて、さらに「お子さん連れで大変でしょうが、無事日本へ帰国してください。そのうちに平和が回復すれば、また日本と往きができる日も来るでしょう」と、流暢な日本語で励ましの言葉で送ってくれた老主人のことは今でも忘れられない。

吉州の街を遠望する辺りから脇道に入り、しばらく進んで鶴東川を徒渉し街道に出ると、迂回してきた人々の数は増え列をなした。

業徳の街の入口で初めて保安隊の検問に遭った。言葉遣いは乱暴だが、取扱いは石鹼やマッチを没

収した程度で済み、業徳駅から城津へは日本人を列車で運んでいるから急いで行けと言われて、小走りですぐ向かった。停車していた貨物列車に一斉に押し寄せる人混みにもまれながら、家族全員はどうにか乗り込むことができたのは幸いだった。

### 三 暴虐の街・城津と憂愁の街・咸興

城津駅に着き、押し合うようにして駅前に出ると、ソ連兵が戦車の天蓋から身を乗り出して、日本人を見下している。戦車を取り囲んだ朝鮮人の群衆が赤旗を打ち振りながら「マンセー！ マンセー！」と熱狂的に叫んでいた。それを横目で見ながら、侮蔑と報復の目に追い立てられるようにして、城津駅機関庫に向かった。だっ広い庫内は薄暗く、コンクリートの床の上に<sup>かまき</sup>吠を敷いて寝起きしている先着の避難民でごった返していたが、女性たちの顔は一樣にすすけていて陰気臭かったが、ソ連兵の暴行から逃れるために、鍋墨を塗ってわざと顔を汚していることを知ったのは、その夜のことだった。我が家も吠を手に入れて寝

場所を確保し、最初の夜を迎えた。うとうとしていたが、突然の赤ん坊の泣き声で目が覚めた。するとすぐに声がした辺りから、一斉に「ワアー」という大きな叫び声が上がった。驚いて薄明かりの中を透かして見ると、マンドリンを腰だめに構えたソ連兵が四、五人、避難民の寝ている所に入って「ダワイ！ ダワイ！」と叫びながら荷物を手当たり次第に掻き回して、めぼしい物を物色し奪っている。別の方向から避難民の「ワアー」という喊声があがると、ソ連兵は声のする方に向かって銃口を向け大声でわめいた。すると途端に喊声をやみ、騒ぎは静まったが、ソ連兵の略奪は続いていた。ソ連兵のそばの人は声も立てられないので、離れた場所にいる人たちが一斉に叫声をあげることが、無力な避難民の間で取り決められた唯一の牽制手段なのだった。

そのうちに、夜ばかりか白昼堂々と「シギ、ダワイ！（時計を出せ）」とか「マダム、ダワイ！」とか叫んで侵入し始めた。物盗りだけではなく、

女性を求めるようになってきた。女性がトイレで襲われたとか、戸外に出た途端に拉致されたとか、不穏な話が頻発し始めた。女の人は鍋墨で顔を汚すぐらいでは危険なので、黒髪を切って丸坊主にし、だぶだぶの男物の服を着て男装する娘たちが増えてきた。

一週間ぐらい経ったころ、十数人の日本人が拉致され海岸で銃殺されたという、戦慄的な情報も流れてきた。はじめのうちは、殺されたのは元憲兵と元警察官だったらしいが、いや鉄道の人たちもだとか、女性も二、三人強姦されたあとで始末されたらしいとかの噂話が伝わって、人々は恐怖のどん底にたたき込まれた。この事件の犠牲者は、後日この事件を取り上げた藤田フジエさんの『地獄よりの生還』という本によると、城津駅の鉄道関係者六人の方々だったというのが真相だったらしい。

征服者の立場になったソ連兵の蛮行に痛めつけられながら、大豆やジャガイモ、ときには野草混



じりの雑炊を啜りながらの日々を過ごしていたが、それが原因となって下痢患者が続出し、朝起きてみると機関庫周辺は下痢便で埋めつくされているという劣悪な衛生環境の中で、ひたすら南下を待っていた我々に輸送列車の運行開始が伝えられたのは、九月も二十日を過ぎていた。そして我が家の出発は第三陣で、二十二、三日ごろだったと思う。

四時間余り、すし詰め貨車で揺られて咸興に着くと、またしても「ダワイ！ ダワイ！」と叫んで威嚇するソ連兵の銃口に誘導されて、駅前広場に集められた。ここでは既に八月下旬に、「咸鏡北道避難民会」が組織されていたそうで、その会の係員に案内されて武徳殿へ向かった。そこでの話では、一度南下した列車がソ連軍に越境を拒否されて、鉄原から北へ逆送され、その一部は元山で下車させられたが、およそ二千二、三百人の者は再び咸興へ帰ってきたらしい、ということだった。幸いに、その日のうちに会の世話で朝日町通り

の相馬旅館に宿所が決まり、弥生町の玩具屋の矢吹一家と相部屋になった。旅館の主人に、気になっていた街の治安についてたずねると、ソ連軍進駐一週間ぐらいは、日本人住居襲撃が頻発していたので、屋根の上や天井裏へ逃げ隠れしたそうだが、最近は取締りが厳しくなってきた、街は平静を保っているとのこと、城津との違いを知って安心した。

九月末ごろになると、咸興の避難民は一万七千人を越えていて、郊外に食糧調達に行った祖父の話では、城川江に架かる萬歳橋の下で野宿をしている人たちが大勢いたらしい。虱の発生に悩まされ始めたのも、このころからだ。虱の繁殖ぶりはずさまじく、日中には衣類の折り目や縫い目に隠れている虱をつまみ出して、爪で文字通り「シラミ潰し」にするのだが、夜になるとまたどこからともなくやってきては、古巣に戻って生き血を吸うのである。やがてこの寄生虫が原因で、極度の疲労と栄養失調で衰弱しきっている避難民の間

では、「再帰熱」という伝染病が猛威を振るい始めて、咸興の街は死の影に脅え、沈うつと憂愁の暗雲に覆われていった。

燎原の火のごとく広がっていたこの熱病が、ついに我が家にも飛び火してきて、まず私が発病したのは十月の半ばごろだった。罹患して治癒するまでの二週間ぐらいの間の記憶は、高熱と下痢に冒されていたせいだろうが、全く空白で思い出せない。ただ耳が全然聞こえず、会話ができなかったことだけは覚えている。

回復したあともしばらくの間は、髪の毛が全部無くなるのではないかと心配するほどポロポロと抜けたので、「脳までやられたのではないか？」と母が心配したということも無理なからぬことだったと思っただ。

私が病に伏せている間にも、病魔は宿舍全体に広がり、我が家でも全員が発病したが、幸いに妹を除いてはみんな軽症で済み、一週間ほどで回復した。看病といっても医薬品があるわけではな

く、お粥に野菜スープかりんごジュースで栄養をつけ、あとは寝かせておくしか手だてはなかった。

母の徹夜続きの看病もむなしく、一時小康を保っていた妹の容態が急変して、母の乳房にすがったまま息を引き取ったのは、十一月十七日の明け方だった。その日の午後、妹の遺体は、それまでの度々の略奪からも母が密かに隠し通していた赤い花柄の着物で着飾られて、遺髪だけを残して祖母の背に負われ、祖父に伴われて墓地へ向かった。母も我々兄弟も祖父母に諭されて同行しなかった。埋葬した場所は分からない。享年三歳。読経も無く寂しい野辺送りだった。

十一月末ごろから死亡者が激増し始め、我々の宿舍からも数人の犠牲者が出たが、特にひどかったのは元遊廓街にすし詰めに押し込まれていた人たちの間で、死者が多かったことで、一家全滅という悲報が相次いで聞かれた。

やがて、疫病に呻吟する避難民たちの身の上にも、北朝鮮の苛酷な冬が情け容赦なく訪れてきて、

十二月を迎えた。その夜、突然我が家にも、富坪という名も知らぬ土地への移動が伝えられた。

#### 四 富坪での惨劇

昭和二十年十二月二日。突然伝えられた富坪への移動命令によって、ソ連軍監視兵によるマンドリン包囲網の中で集合した三千二百八十二人の避難民は、無蓋貨車にぎっしりと詰め込まれて、寒風吹きつける中を富坪へ向かった。

たどり着いた富坪は、日本軍の演習場の兵舎だったらしく、小高い丘の上に九棟の木造の建物が並び、丘の下を流れる小川の向こうに見える冬野は、荒涼として物悲しい風景であった。しかも、建物の窓ガラスは破損し床は荒れ放題で、暖房設備などは全くないし、炊事施設すら見当たらなかった。こんな所で、極寒零下十数度を下回る厳しい冬を過ごすのかと思うと、前途は暗澹たるものだった。朝鮮人民委員会でも、当初からこの悪環境下で三千人もの集団の越冬は無理だと判断していたらしく、隣接部落への出入りは自由に、事

情の許す者には、近隣町村の農家に手伝いに出ることを許可していた。我が家では、イサ子姉が隣村定平の農家に行くことになった。我々の宿舎からは、ほかに数人が分散生活のために出て行った。

ところがその数日後に、一転してソ連軍より收容区域からの外出禁止令が出され、捕虜並に身柄を拘束されてしまい、わずかに配給される大豆粕以外には、自分での食糧調達の手段を絶たれてしまった。

富坪に收容されて旬日が過ぎたころ、恐れていた猛吹雪が襲ってきた。飢餓、栄養失調、再帰熱で衰弱し切っているうえに、ほとんどの者が夏着のままの避難民にとつて、この寒波は凶器にも等しかった。死者が続出し、その遺骸は吠に包まれて裏山に土葬されていた。

本人は私たちに隠すように装っていたが、数日前から体がだるそうにしている母が、突然私を散歩に誘ったのは十二月十八日の夜だった。その夜は風もなく、寒天には満月が冴え、皓々と照らす

月光が積雪に映えて明るかった。「きれいなお月さんだね！ きつと父ちゃんは先に島原へ帰って、この月を見ているよね」などと父への思いを語りながら歩いていた母が、突然立ち止まり私の手を握って向き合くと、「あなたはお兄ちゃんだから、これから先何が起きようとも、必ず生き延びて島原へ帰るのだよ！ 頼むからね！」と、真剣な眼差しで諭すように話し出した。「僕は大丈夫だから。みんなで頑張って島原へ帰ろうよ！」と答えると、母は「それを聞いて安心した。きつとだよ。約束したよ！」と、いつもの母には似合わずに、しつこく念を押すように言って微笑んでくれた。

母の容態が急変したのは、翌十九日の昼前だった。外にいた祖父と弟と私の三人が、うろたえた祖母の声に慌てて母の枕辺へ駆けつけたときには、既に母の顔は蒼白で、意識は混沌として口もきけない状態だった。このとき、隣で起居していた方が「心残りのないように」と言われて、隠し持つておられた最後の一本のカンフル注射を打ってく

ださった。あの異常な環境下で、思いもよらぬ医薬品を頂いた恩人の名前を失念して、長年胸奥につかえていたが、後年、清津にいた親戚の松本の姉との思い出話の最中に、突然に「牧山」という名を思い出し、それからつてを求めたところ、大和町の「牧山病院」の奥様だったことが、実に三十七年目にして判明したが既に亡くなられており、積年の感謝の思いを込めてご冥福を祈った。

母はとうとう帰らぬ人となり、通夜もなく吠に包まれた遺体は祖父母に伴われて、夕日の傾く丘へ運ばれていった。幸いにその日は好天で凍土が緩んでいたのが穴を掘り土中に埋葬することができたとのことだった。享年三十八歳で、突然でありにも呆気ない母の死だった。

母の死の前後から、各宿舎から運び出される遺体は連日あとを絶たず、あまりの多さに吠が不足してきて、遺体を完全に包むことができず、足がはみ出したまま運ばざるを得ない状況になっていた。しかも、飢えと寒さと病魔で搬出作業がで

きる男手は減り、そのうえ積雪が深く地面は凍土となつて土中に埋葬できないので、雪解けまで雪をかぶせるだけで放置するという、この世での地獄図が出現するようになった。北風ほえる丘陵を覆う氷雪が、望郷の念を抱きつつ異郷に斃れた人々の碑銘無き墓標となつていた。

一月の半ばを過ぎたころから、やつと日本人世話会からわずかながら食糧の配給が行われ、若いころにブリキ職人だった祖父が中心となつて、六、七人の経験者で工務部を組織して、支給されたドラム缶を改造してストーブを造り、煙突をつけて各宿舎に暖房器具として配置したが、それでも四月までの死亡者は千四百三十一人となり、北朝鮮難民最大の犠牲者を出したのである。

北朝鮮にも遅い春が訪れる四月になり、積雪が消え野山がもえ始めると、暗い宿舎に幽閉されて息を潜めて生きていた人々は、食用の野草を求めて一斉に野山に出た。死からの解放感と生への希望に満ちて、どの顔も明るくなった。我が家では、

定平の農家でひと冬を過ごしたイサ子姉を祖父が迎えに行き、無事に帰ってきた。

自然の蠢動と共に、破損したまま放置されていた浴場を、祖父たち工務部が修理し、分会毎の入浴もできるようになった。蒸気釜を装備した特殊車両を持ち込んだのソ連軍による虱駆除の実施、四、五キロメートルほど離れた山で切り出した丸太を担いで運び、ソ連軍へ引き渡す労賃作業の開始など日常の生活にも人間らしさを取り戻す変化が起こった。また、有志によつて演芸会が催され、忘れていた笑いと歓声を思い出し、大いに盛り上がったものだった。

しかし明るい話題ばかりではなかった。夜毎に裏山を火の玉が飛び交つていた。凍結のため土中に埋葬することがかなわずに、氷雪に閉ざされて眠っていた数百の遺体が、雪解けと共に露出し青光を発し、人魂となつて漆黒の夜空を浮遊するらしかった。とりあえず、男手によつて遺体の埋葬整理が行われた。二十坪ほどの穴を掘り、その中

へ遺体を幾重にも並べ、そのうえに土をかける。大きな土饅頭は八つを数えたと聞く。もちろん墓標などは無い。

この埋葬作業が四月末ごろに終わるのを待って、五月五日には松の木を削って「嗚呼戦災日本人の墓」と刻み、裏面に「この地に死亡した日本人千四百三十一人の冥福を祈り残留日本人之を建つ」と書いた墓碑の前で合同慰霊祭が行われ、僧侶もいて読経のあがる中、祖母が五分会を代表して焼香をしたが、参列した者はみんな泣いた。このとき、初めて祖父母から母の埋めた所を知らされた。整理された共同墓地から少し離れた土盛りの下に眠っているとのことで、寂しさもひときわ哀れであった。

慰霊祭が終わったところから、避難民の南下をソ連軍は黙認するらしいとの情報の流れ、富坪脱出がささやかれ始めた。そんなところに突然、列車で南下させるとの保安隊の指示が出て、収容されていた数十人の孤児全員が、先発として富坪駅へ

向かって出発して行った。これを知って、我が家でも単独で脱出することを決め、食糧を貯え荷物を整理して機会を待つこととした。

決行前日に母の墓へ最後の別れに行き、地獄の富坪を脱出し南へ向かったのは、昭和二十一年五月十日の夜明けだったと思う。

#### 五 三十八度線を越えて

新上の町に入り、付近の部落を迂回し山路に入った。その日は山の中の農家に宿をこい、泊めてもらった。翌早朝に出発して歩いていたが、昼ごろだったろうか、高原の町からの帰りだという髭の老人に出会った。老人は私たちを呼び止めて、「昨日高原駅で日本人を乗せた列車が南へ向かうのを見た。ここからだとゆっくり歩いても夕方には着けるから、駅へ行ってみてはどうか」と、たどたどしい日本語で親切に話してくれて、駅への道順を教えてくれた。この言葉に幾重にも礼を述べて、教えられた道を急いだ。

夕暮れ近くにやっと高原駅にたどり着き、すぐ

に駅舎をたずねると、年配の駅員から「間もなく日本人を元山へ運ぶ列車が到着する。五人ぐらいならば乗れるだろうからホームで待ちなさい」と教えられて、しばらく待つうちに避難民を満載した無蓋貨車が入線してきた。車上から引き上げられ車枠をよじ登って、どうにか家族全員が乗り込むことができた。

星空の下を一時間ほど走って元山に着いた。世話会の人に案内されて東本願寺に落ち着いたが、先着の人たちに私たちが加わり、混雑している本堂の片隅で休息しているときに、思いがけないことが起きた。それは、会寧にいた叔父が突然に現れたのである。驚いた私は思わず叔父に飛びついたが、気持ちが高ぶっていて涙が止まらなかった。先着していた叔父は、咸興方面からの避難列車が到着して、人々は東本願寺に収容されていると聞き、ひよっとしたら私たちがいるかもしれないと、数日前から幾度も幾度もここへ足を運んでいたのだという。すぐに叔父たちの収容先へ向かい、叔

母と久美子姉に再会した。お互いの無事を確かめたが、喜びで声も出なかった。

安心して落ち着いた日々を過ごすうちに、世話を中心に列車による集団脱出の計画が進められ、家族毎に必要とする脱出資金が集められた。ソ連軍や保安隊との交渉が進展して、百余人の集団で南下列車に乗車したのは、六月の十日前後だった。列車は客車で、朝鮮人乗客も同乗しているものだった。

順調に三時間ほど走っていたが、昨年はこちらから北へ逆送されたという鉄原駅を通過したが、何事もなく、この分なら国境近くまで行けるかもしれないと淡い期待を抱いたのも束の間、次の駅大光里に停車すると、日本軍の九九式小銃で武装した朝鮮保安隊員が各車両に乗り込んできて、日本人は全員下車させられ駅前に集められた。我が方の代表者が保安隊と交渉の結果、鉄道沿線や幹線道は通らないという条件で開放され、山麓へ向かい山路へ入った。恐らく賄賂で話がついたのだろ

う。ところが一時間ほど進むと、丘のうえに建つソ連軍兵舎にぶつかった。陽が落ちるのを待ち、兵舎の灯りをうかがいながら、極度の緊張の中を声を殺し這うようにして丘の裾側を通り抜けた。

翌日の昼下がり、川沿いの道を進んでいると、突然に対岸で銃声がとどろいた。不意を突かれた人々は列を乱し、川原に駆け降りてうずくまった。浅瀬を渡ってきたのは、付近の部落の自警団の連中だった。銃をかざして所持品検査を始めたが、我々の代表者が応分の賄賂を渡して話をつけ、その場を切り抜けた。このように幾度か危機に遭遇しながら、二夜の野宿を経て、やっと越境のための渡河地点へ到達し道端で休んでいると、突然に自転車に乗ったソ連軍将校が追跡してきた。

一瞬北へ逆送されるのではないかと、我々の心は凍りついた。しばらく代表者と話していたが、幸い黙認するらしく「ドスピダーニヤ」と言っ去って行った。安心して気を取り直した我々は、確かな足取りで渡河地点へ向かい、付近の部落の

農家に分宿して、北朝鮮最後の夜の眠りについた。渡航料はもちろんその夜のうちに支払われた。

翌朝、まだ明けやらぬ薄明かりのもとで、苦難の逃避行を続けてきた我々の集団は、粛々と渡河地点へと向かって行った。一艘しかない渡し舟は、すでに待機していた。十人ぐらい乗せては対岸に向かう。舟を待つて川原で過ごしていた。やっと我々の番がきて乗り込んだころには、夜は白々と明け始めていた。暗緑色の河水は、舷側をたいて舟体を揺るがすが、朝鮮半島を南北に分断して米ソが対峙する国境三十八度線を、今脱出しつつあるという緊張からか、舟上の人々は沈黙してしわぶき一つ発しない。舟は無事に対岸に着いた。

川原に降り立った人々は、感極まって砂上にひれ伏し泣き出す者、互いに手を取り合って万歳を叫ぶ者、「ソ連の馬鹿野郎！」と対岸に向かって悪態をつく者など、思い思いの動作をしながら幾多の犠牲を払い苦難の道を踏破して、やっそここまでたどり着いた感激を表していた。休む間もなく、



米軍の駐留する東豆川へ向かい、ここで簡単な所持品検査を受けたあと、旅客列車で京城へ運ばれ、東本願寺に収容された。米軍の方針により、日本人集団の同一場所二十四時間以上の滞在は禁止されているらしく、翌朝九時ごろには釜山行き列車に乗せられたが、車内は貨車だが寝そべることができるほどゆったりしていた。

夕刻、釜山駅到着。はやる心を抑えながら棧橋へ向かい、接岸している引揚船に乗船した。船倉の客室に落ち着き、やがて夕闇迫る中を船は静かに岸壁を離れ、一路博多へ向かった。デッキにいてもドラも鳴らず、テープが投げられることもなく、まさに敗残の民が祖国へ逃げ帰る沈黙の船出であった。

「内地だぞ！」「博多の灯が見えるぞ！」との声に起こされて、船内の狭い階段を駆け登ると、夜がまだ明け切れぬデッキには、飛び出してきた人々の歓声で埋まっていた。

防疫のため、十日ほど港外に停泊したあとに、

十カ月に及ぶ避難行に終止符が打たれて、六月二十一日祖国日本の土を踏んだときには、生きて帰った安堵感と、孫二人を無事に連れて帰ってくれた祖父母への感謝の気持ちと、亡き母への加護への思いが一度に込み上げてきて、放心したように身も心も震えたのを忘れない。

その日の夜行列車で故郷島原へ向かい、翌朝我が家にたどり着き、先に帰っていた父と再会できたが、幾山河を越え茨の道を踏破して幸運にも生還した故郷の夜は、不運にも異郷に斃れ、永遠に帰らざる人となった母と妹への悲憤と追憶のなかで静かに更けていった。

#### 六 引揚げ後の生活

帰国後とにかく復学せねばならぬと、転校手続きに行くと、三学年は一学期しか就学してないと理由で三年編入と言われたが、父が教頭を説得して四年生として島原市立第三小学校に転校することができた。卒業後、新制の市立第二中学校に進学。しかしながら、財産のすべてを失い残って

いるのはこの家だけという我が家の生活では、楽なはずがない。そのうえに父は、「子供たちにとつて母親は一人であるべきだ」との信念を貫いて再婚もせず、鍋釜の販売や魚の行商などで母親代わりの祖母に助けられて、我々兄弟を育ててくれた。明治建国以来の我が国の「かたち」を築き上げてきた、祖父母と父たち明治生まれの人間の保護の下に、県立島原高校に進学、さらに長崎大学経済学部に進み、卒業後には生命保険会社へ入社、本社勤務の後福岡へ転任。当地で妻紀美子と結婚、娘二人をもうけた。妻と二人の娘を連れて、久留米、福岡、佐賀、福山で営業所長を、下関、松江両支社では次長を経験し、さらに大分、熊本、長崎では支社長となり、関連会社に専務として出向後、定年を迎え現在に至っている。

経済成長時代の戦士といえは聞こえは良いが、反面引越しのたびに妻にかけた苦労は大変なもので、いくら感謝してもしきれぬものではない。子供たちにも長女が小学校を三回、中学校を二回

転校、次女も小学校三回、中学校二回、高校二回転校させて苦勞をかけた。それにもかかわらず、長女は広島大学医学部総合薬科を卒業後、現在薬販会社に薬剤師として勤め、一児の母であるし、次女は短大卒業後、福岡の大手デパートの企画部に勤務し、結婚退職後、現在専門学校教師として勤務しており、一児の母である。父親の転勤に伴って転校の繰り返しだったにもかかわらず、よく頑張ってくれたと感謝している。

思い返せば、引揚げ以来五十七年の歳月が流れ、祖父は八十三歳、祖母は八十七歳、父は九十四歳で亡くなり、身内での引揚げ体験者は、弟とイサ子姉と久美子姉と私の四人になってしまったが、日本の敗戦が生んだ歴史の大きな転換を象徴する「北緯三十八度線」を越えて、大げさに言えば、歴史の試練を乗り越えて生き抜いてきた誇りと自負を風化させぬよう記録に止めておきたい。

最後に、母や妹をはじめ異郷の地に命を落としたり多くの人々の霊に、心より哀悼の意を表すると

共に、二十一世紀に生きる娘や孫たちには、「昭和」という時代が生んだこのような悲劇が再び訪れないことを切に願って止まない。

『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦15』の訂正について

大分県 波多野保子「あかい夕日」

459頁 上段3行目

削除) 京城の

460頁 上段2行目

削除) 京城は

461頁 上段1行目

誤) 十七日になると京城市街の

正) 翌日からは外の

462頁 下段9行目

削除) 京城に残っていた日本人は

以上、訂正してお詫び申し上げます。